



Title	日本語母語話者と非母語話者による有効なコミュニケーションにおける調整過程
Author(s)	郷丸, 静香
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1998, 32, p. 33-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語母語話者と非母語話者による有効な コミュニケーションにおける調整過程

郷 丸 静 香

キーワード：有効なコミュニケーション コミュニケーションの破綻

修復のタイプ NNSのシグナル

1. はじめに

ある言語の母語話者（以下NS）と非母語話者（以下NNS）が会話をするとき、インプットだけでなくインターアクションも調整することが明らかになっている（Long1983）。第二言語習得の観点からは、このインターアクションの調整、中でもコミュニケーションの破綻（communication breakdown）が起こったとき、それを修復するためのNS、NNS双方による共同作業（先行研究では「意味の交渉」と呼ばれる）が理解に重要であると指摘されている（Gass and Varonis1985）。しかし、この共同作業自体がインプットを理解可能にするのではないという主張（Aston1986, Ehrlich et al.1989）もあり、共同作業とインプットの理解がどのように関係しているのかは明らかになっていない。この関係を明らかにするには、個々のコミュニケーションの破綻がどのように修復され理解に至ったのかというプロセスを談話構造の中で捉える必要があると思われる。そこで本研究では「短時間で正確に十分な情報を与えられること」を「有効なコミュニケーション」と定義し、この「有効なコミュニケーション」において、コミュニケーションの破綻が起きた場合にどのような修復が行われるのかを明らかにすることが目的である。本稿では特に修復のタイプの抽出と各タイプに分かれる原因をNNSが行う働きかけを中心に考察する。

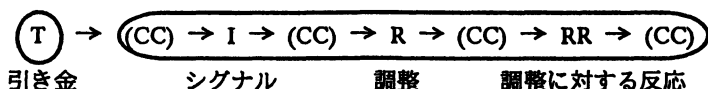
2. コミュニケーションの破綻と修復

2.1 コミュニケーションの破綻と修復の定義

NS、NNSのコミュニケーションにおいては、様々な問題が生じるが、本研究ではGass and Varonis (1991) における「不完全な理解 (Incomplete understanding)」を分析の対象とする。そしてこの不完全な理解の発生からその修復の完了までを1つの「コミュニケーションの破綻」とする。また「修復」を「コミュニケーションにおいて話し手と聞き手との間で不完全な理解が認識され、それを解消する試み、すなわちコミュニケーションの破綻を解消する試み」と定義する。

2.2 修復の構造

コミュニケーションの破綻が起こった場合、その修復はどのように開始し、どのように完了するのであろうか。Varonis and Gass (1985) は修復の過程を次のようなモデルで示している。



このモデルにおいて、TはTrigger (引き金) を表す。つまり聞き手の不完全な理解を起こした話し手側の発話である。IはIndicator (本稿ではシグナルと呼ぶ) で、理解が不完全であることを伝える聞き手側の発話である。RはResponse (本稿では調整と呼ぶ) でシグナルに対して不完全な理解を解消するための話し手の試みである。RRはReaction to Response (調整に対する反応) で、任意の要素である。聞き手は理解したことを示す場合もあるし、更にシグナルを出す場合もあるし、あるいは何も無い場合もある。CCとはComprehension Checks (理解の確認) を表し、いかなる場所でも任意で起こる。本研究もこのモデルに従い、修復とは「引き金」、「シグナ

ル」、「調整」、また任意の要素として「調整に対する反応」のプロセスを経て完了するものとする。しかしながら実際の会話を観察すると、いつもこのモデルの一巡で修復が完了するわけではない。実際には何層もの入れ子型になって修復が完了する場合もある。次の会話はF4 (NNS) とJ2 (NS) がタスクAを行った時の実例である。

25J: (前略) 男の人 刺した男の人っていうのは その一刺さ T

れた女の人と一交際 付き合っててー 前から

26F: んー ちょっと もう一度 I

27J: んー えっと 刺した男の人はー んと 女の人とー R

その刺された女の人ね (uh-huh) と 以前から いぜ

前から 交際をしててー

28F: これは何ですか RR/I

29J: 交際 付き合っててー R

30F: こうさい RR/I

31J: 恋人同士だった (あー/はーはーはー) んですよ その二人 R

(はい) で その二人が 喧嘩か何か多分したんだと・・・

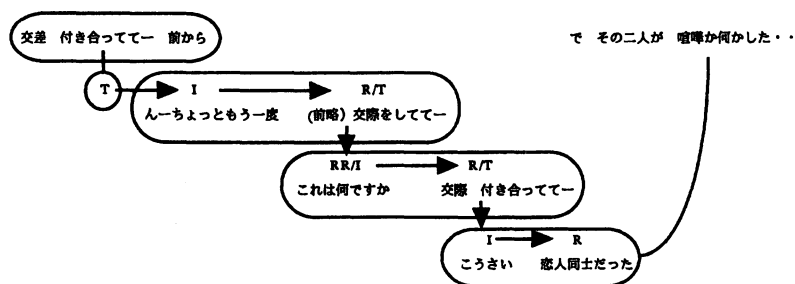


図 1

25Jの「交際」、「付き合う」が引き金になり、コミュニケーションの破綻

が起こる。そこでNNSは26Fでシグナルを出し、それに対してNSは27Jで調整する。しかしながらこのシグナルが曖昧であったためにNSは25Jを反復するだけで、NNSは肝心の「交際」の意味が聞き出せない。そこで28Fで更にシグナルを出す、NSは29Jでも反復するだけである。NNSが30Fで「こうさい介」と分からない語を特定することによってNSは31Jで初めて適切な調整を行うことができ、修復は完了する。この例では25J～31Jまでを1つのコミュニケーションの破綻とする。図1から25Jが本来の会話の流れであり、31Jでやっと同じ流れに戻ることが出来たと考えるが、この間には3回(26F、28F、30F)のNNSからのシグナルが含まれている。つまり1つのコミュニケーションの破綻は本来の会話の流れに戻って初めて修復が完了したと見なすので、コミュニケーションの破綻の数とシグナルの数は必ずしも一致しない。

3. 調査

本研究では「有効なコミュニケーション」を判定するために、タスクを設定し、タスク遂行にかかった時間とタスクの内容に関する理解力テストの結果から有効性を測ることにした。

3.1 タスク

タスクはNSがニュースを聞き、その内容をNNSに説明するものとした。ニュースの内容は、A、B2つの種類を設定した。テープに録音したニュース文は次の通りである。A、Bとも読み上げ時間は30秒程度で、情報量を揃えるためにタスクAは41文節、タスクBは40文節とした。

タスクAの内容

9月10日、岡山県の飲食店で、酒に酔った男性が女性店員を刃物で刺し

て逃走しました。調べによるとその男性は以前からその女性と交際を続けており、犯行の動機は男女関係のもつれであると見られています。刺された女性は全治1カ月の軽傷です。犯人は今朝自首しました。なお犯行に使ったナイフも近くの川で発見されました。

タスクBの内容

6月20日、埼玉県の銀行で、ヘルメットをかぶった男性が現金3000万円を奪って逃走しました。調べによるとその男性は以前から多額の借金の返済を続けており、犯行の動機は返済契約のもつれであると見られています。奪われた現金はまだ発見されていません。犯人は現在も逃走中です。しかし逃走に使ったバイクは近くの公園で発見されています。

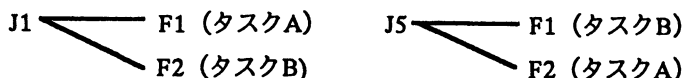
3.2 理解力テスト

理解力テストは全部で9問で、A、Bで質問項目を可能な限り揃えた。テストの質問が理解できないことによる不正解を避けるために、実施時のテスト問題は日本語と英語の両言語で書いてある。解答もどちらの言語で答えても良いことにした（APPENDIX参照）。

3.3 被験者

NNSは日本語学習歴、日本滞在期間、日本語能力レベルを可能な限り揃えた。F1～F8はみな調査時には来日して7カ月で、大学の日本語コースを6カ月間受けている。性別はF6以外はすべて男性で、年齢は18才～31才である。母語はフィリピン語2名（F1、F3）、ポルトガル語2名（F5、F6）、北京語1名（F2）、ブルガリア語1名（F4）、インドネシア語1名（F7）、タイ語1名（F8）である。日本語能力については日本語能力試験3級の聴解試験で70～80%代の正解率であった8名を考察の対象とした。

NSは教授経験の有無によって修復のプロセスに違いが現れることを予想して、教授経験のあるNS (J5～J8) と教授経験のないNS (J1～J4) の2つのグループを設定した。J5～J8の日本語教授経験は3年～10年である。またJ1～J4は教授経験がないだけでなく、NNSとの接触自体がほとんどない。J1～J8はすべて女性で、J1～J4は20才代、J5～J8は30～40才代である。NSとNNSの組み合わせは、例えば次のように設定した。



同様にJ2とJ6がF3とF4へ、J3とJ7がF5とF6へ、J4とJ8がF7とF8へ、それぞれタスクA、Bを行った。NSとNNSはすべて初対面である。この組み合わせによって、教授経験のあるNSと教授経験のないNSが同じNNSに対してタスクを行うことになるので、NNSがより速く正確に理解できた場合には、コミュニケーションの破綻とその修復のプロセスに違いがあると考えることが出来るのである。

3.4 調査手順

調査は以下のような手順で行い、録音と録画を行った。

- ①NSとNNSは自己紹介を含めて、10分間自由に会話する。NSには会話のやりとりの中で、NNSの日本語能力を把握するように告げておく。
- ②タスクを行う。まずNSに筆者がタスクAを読み上げたテープを聞かせる。このときNSには「今から聞く内容を後で正確にNNSに伝えて下さい。メモをとってもかまいません。テープも何度聞いてもかまいません」と告げておく。テープを聞いた後、NSには後でNNSが受ける理解力テストの問題を見せ、テストに出る内容を必ず伝えるように告げる。NSがテープの内容を理解したら、その内容をできるだけ短い時間で正確にNNSに伝えるように告げる。このときメモを見ながらでも構わないが

NNSにメモ自体は見せないように注意する。NNSはNSの説明を聞きながらメモをとっても構わないこととする。NNSにも後で理解力テストがあることを告げておき、分からないことがあったら聞き返すように促しておく。

③NNSが理解力テストを受ける。

(NS、NNSともに①～③の手順をタスクBについても同様に行う。)

④NS、NNSの両者に録画資料と文字化資料をもとに1週間以内にフォローアップ・インタビューを行う。

4. 分析と考察

4.1 有効なコミュニケーションの判定

有効なコミュニケーションを判定するために、タスク遂行にかかった時間を測定し、時間の短いものほど有効とした。また理解力テストを行い、高得点が得られたものから順に有効と判定した。

解答は答案用紙に書いていなくてもフォローアップ・インタビューで正解を確認できたものは正解と見なした。表1でタスクAにおいて1問不正解であったNNSが3名(F3、F5、F6)いるが、これは重要な情報だと判断せず聞き流したために不正解となった。よって理解できなかったのではなく、単に暗記しなかったための不正解である。同じくタスクBにおいても1名(F5)が不正解で、これも暗記しなかったことが原因であった。つまり理解力テストの不正解はすべて暗記の問題と考えられる。よって理解力テストの結果はみな等しく扱えるので、有効性を測る基準はタスクに要した時間の長短ということにした。次節ではタスクに要した時間を基準に有効なコミュニケーションの順に並べ、それとコミュニケーションの破綻の関係について見ていくことにする。

	聴解テスト	タスクAの 正答数 (9問中)	タスクAに 要した時間	タスクBの 正答数 (9問中)	タスクBに 要した時間
F1	20(77%)	9	3'30	9	2'55
F2	23(88%)	9	3'07	9	3'17
F3	20(77%)	8	4'15	9	8'06
F4	21(81%)	9	8'53	9	4'33
F5	22(85%)	8	3'54	8	3'16
F6	22(85%)	8	4'44	9	3'43
F7	19(73%)	9	4'41	9	10'44
F8	21(81%)	9	12'16	9	6'35

表 1

4.2 有効性とコミュニケーションの破綻の関係

タスクにかかった時間が短いということは、NNSがNSの説明を容易に理解できたと考えられる。つまりコミュニケーションの破綻は有効な場合ほど少なく、またコミュニケーションの破綻が起こったとしても、すばやく修復されることが予想される。そこで有効性とコミュニケーションの破綻の関係を見るために、まずコミュニケーションの破綻の数を調べた。そしてそれぞれのコミュニケーションの破綻の特徴を見るために、修復が完了するまでのターン数を調べた。ターン数が多いということは修復に困難が伴い、時間がかかっていると考えられるからである。ターン数はNNSのシグナルから数え始め、NNSの「わかりました」、「あーはい」など分かったという応答まで、あるいは応答がない場合はNSが次の説明に入るまでを数えた。更に修復のプロセスに注目し、コミュニケーションの破綻が起こってから、修復が完了するまでのプロセスを以下の3つのタイプ(A, B, C)に分類した。これはターン数の多くなる原因として、NNSのシ

グナルの意図とNSの調整の不一致の問題、NSの行う調整の中に更に引き金となる発話が現れるという問題の2つがあると考えられるからである。

A: NNSの1度のシグナルとNSの1度の調整で修復が完了できる。つまりシグナル⇒調整⇒(調整に対する反応)で修復が完了する。よってターン数は2〜3ターンで修復は完了する。

B: NNSのシグナルが出された後、NSの1度の調整では修復できず、再度シグナルが出される。これはNNSがシグナルを出した意図とそれに対するNSの調整が一致しなかったために修復が遅れたものとする。ターン数は4以上となる。

C: BタイプのようにNNSのシグナルの意図とNSの調整が一致しないだけでなく、NNSのシグナルに対してNSは調整を行うが、その調整の中に更にNNSに不完全な理解を引き起こす要因が現れ、次々に修復が遅れるものとする。

表2はタスクにかかった時間の短い順に、上から並べたものである。表の左端はNNSを表す記号(F1〜F8)とタスクAあるいはBを表す。まずタスクに要した時間は2分55秒から12分16秒まで、かなりの差がある。コミュニケーションの破綻数はF4・A以降は多さが顕著に現れているものの、F1・BからF3・Bまではばらつきがあり、有効な場合に必ずしもコミュニケーションの破綻数が少ないわけではない。しかしながら修復ターン数を見ると、有効な場合はそれぞれの修復が完了するまでのターン数が少ないことが分かる。有効でない場合ほど修復ターン数が増えており、F3・B以降はそれが顕著に現れる。次にコミュニケーションの破綻数を修復のタイプ別に見ると、有効な場合ほど一度のシグナルで修復が完了するAタイプが多く、B、Cタイプがほとんどない。修復が遅いB、Cタイプは有効でな

	タスクに 要した時間	コミュニ ケーション の破綻数	それぞれのコミュニケーションの破綻における修復 ターン数									
F1・B	255	6	2	3	3	2	2	2				
F2・A	307	3	3	2	3							
F5・B	316	3	2	3	3							
F2・B	317	4	3	2	2	3						
F1・A	330	2	2	5								
F6・B	343	1	3									
F5・A	354	5	3	5	2	3	5					
F3・A	415	6	3	3	2	2	3	3				
F4・B	433	2	2	3								
F7・A	441	7	4	3	5	5	2	5	3			
F6・A	444	3	3	3	3							
F8・B	635	4	3	2	2	3						
F3・B	806	7	3	3	3	4	3	3	11			
F4・A	853	10	2	7	9	6	3	7	2	3		
			10	2								
F7・B	1043	15	3	2	2	3	3	2	4	5		
			13	15	9	3	10	10	9			
F8・A	1216	16	6	2	4	3	9	3	3	2		
			5	5	4	3	6	2	3	6		

*修復のタイプ A・・・ B・・・ C・・・

表 2

い場合ほど現れる。つまり有効な場合とそうでない場合では、現れる修復のタイプが異なり、しかもその出現率も異なるのである。それではAタイプ、Bタイプ、Cタイプに分かれる原因は何であろうか。次節ではそれぞれの修復のタイプに分かれる原因を考えていく。

4.3 修復のタイプに分かれる原因

まず修復のタイプAとB、Cの違いはシグナルが再度出るかどうかである。尾崎（1993）は「聞き返し」が再度起こる原因として、表現形式と発話意図の問題を挙げている。つまり発話意図を明確にしないシグナルは、適切な調整を引き出せないということである。そこで本稿もシグナルの種類によって修復のタイプが分かれるのかを見ていく。シグナルはVaronis and Gass（1985）、町田（1994）を参考にした。また録画資料からシグナルとして観察された非言語行動も加えた。表3の左端は各シグナルを示す。次に「コミュニケーションの破綻数」とは各シグナルによって修復が開始されたコミュニケーションの破綻の数である。A、B、C、の欄にはコミュニケーションの破綻数のうち、修復が完了したタイプの数が示してある。括弧内の数字はシグナルごとのコミュニケーションの破綻数のうち、A、B、Cの各タイプの割合である。

まず「エコー介」はAの修復が全体の3分の2を占める。再度シグナルが出ていないことから、比較的NSが意図の解釈をしやすく、調整がうまくいくと考えられる。「エコー」はBの修復が全体の半分以上を占めており、最初のシグナルでは意図を明確に伝えることができず、NSの調整は適切に行われにくいと言える。「不正確なエコー」はすべてAタイプの修復であることから、意図が伝わり易いのであろう。「不理解の明示」と「NNS自身の理解確認」はNNSが理解の不完全な部分を特定していることから、約7割から8割がAタイプで修復できている。「不理解の明示」の3割がBタイプになるのは、NSの調整の不適切さと考えられる。「もう一度言って下さい」はややBタイプに多い。これも理解の不完全な部分を伝えるにくいシグナルと言える。「間投詞」と「非言語行動」はすべて一度の調整で修復が完了している。以上からシグナルには「理解確認」、「不正確なエコー」、「不理解の明示」のように意図の明確なものとそうでないもの

	コミュニケーションの破綻数	A	B	C
エコー↑	21	13 (61.9%)	7 (33.3%)	1 (4.8%)
エコー	24	9 (37.5%)	13 (54.2%)	2 (8.3%)
不正確なエコー	5	5 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
不理解の明示	13	9 (69.2%)	4 (30.8%)	0 (0%)
NNS自身の理解確認	22	19 (86.4%)	2 (9%)	1 (4.5%)
もう一度言って下さい	5	2 (40%)	3 (60%)	0 (0%)
間投詞	2	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
非言語行動	2	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
合計	94	61 (64.9%)	29 (30.9%)	4 (4.3%)

表 3

があることが明らかになった。それでは先の有効な順に並べたものには、どのシグナルが出されているのかももう一度見てみよう。

表 4 には各シグナルごとに修復のタイプと数が示してある。例えば F1・Bで「エコー」の「A1」とは、「エコー」のシグナルで修復が始まり Aタイプで修復が完了したものが1回ということを示す。F1・BからF2・Bまでシグナルとして「不理解の明示」や「理解確認」が多いのが目立つ。しかも修復はAタイプである。やはり有効な場合にはNNSのシグナルが意図を明確に表すために、NSは調整を行いやすいのであろう。一方、「エコー」はBタイプの修復が多くなるシグナルであったが、やはり有効でない場合のF7・B、F8・Aに多く現れる。しかもBタイプの修復が極めて多い。また「もう一度言って下さい」という曖昧なシグナルも有効でない場合に現れている。つまり有効なコミュニケーションとなる1つの条件は、NNSのシグナルがその意図を明確に表すことにあったである。

	エコー↑	エコー	不正確 エコー	不理解 の明示	理解確認	もう一度	間投詞	非言語
F1・B		A1	A1		A3			A1
F2・A					A3			
F5・B	A1			A1	A1			
F2・B	A1			A1	A2			
F1・A	A1, B1							
F6・B		A1						
F5・A		A1, B1	A1	B1	A1			
F3・A	A2		A1	A1	A1		A1	
F4・B				A1				A1
F7・A	A1, B1	A1, B2		B1	A1			
F6・A			A1	A1	A1			
F8・B		A2	A1	A1				
F3・B	A2, B1, C1			A1, B1	C1			
F4・A	A3, B2				A1	B3	A1	
F7・B	A2, B2	A1, B2, C1		B1	A4, B2			
F8・A		A2, B8, C1		A2	A1	A2		
合計	21	24	5	13	22	5	2	2

表 4

5. まとめ

本研究は「有効なコミュニケーション」を定義し、特にコミュニケーションが破綻した場合の修復のプロセスに焦点を当てた。まず有効性とコミュニケーションの破綻数の関係であるが、有効な場合に必ずしもコミュニケーションの破綻が少ないわけではなかった。しかしながらそれぞれの修復完了までのターン数を見ると、有効な場合は少ないターン数で修復が完了することが多い。そこでこのターン数に違いが現れる原因として、シグ

ナルと調整の不一致の問題、NSの調整の不適切さから更に不完全な理解を引き起こすという2つの問題があると考え、修復のプロセスを3つのタイプに分類した。その結果、1度のシグナルと調整で修復の完了するAタイプが有効な場合に多く、1度のシグナルでは修復が完了しないB、Cタイプが有効でない場合に多く現れることがわかった。有効でない場合は、修復にかかるターン数も多く、結局これがタスクに時間がかかる要因になっていると言えるだろう。次に修復のタイプを分ける原因を明らかにするために、NNSのシグナル別にコミュニケーションの破綻の数とその修復のタイプを調べた。その結果、シグナル自体に修復のタイプを分ける原因があり、意図の明確なシグナルはAタイプの修復が多く、一方意図の曖昧なシグナルはBタイプの修復が多くなることがわかった。更に有効な場合とそうでない場合にどのシグナルがどのぐらい使われているのかを考察した。するとやはり有効な場合には意図の明確なシグナルが多く出され、有効でない場合には意図の曖昧なものが多く出されていることが明らかになった。つまり修復が速やかに完了できるかどうかを決める重要な要因の一つはNNSのシグナルにあったのである。しかしながらNNSのシグナルが意図の明確なものであってもB、Cタイプの修復が現れていることから、修復のタイプを分ける原因はNNSのシグナルだけではない。特にCタイプの修復はNSの調整の不適切さによるところが大きいと考えられるため、NSの調整面からの考察が必要になる。またこれには教授経験が影響しているかもしれない。これらは今後の課題としたい。

参考文献

- Aston, G. 1986. "Trouble-shooting in Interaction with Learners: the more the merrier?" *Applied Linguistics* 7:128-43.
- Ehrlich, S., P. Avery. and C. Yorio. 1989. "Discourse Structure and The Negotiation of Comprehensible Input" *Studies in Second Language*

Acquisition 11: 397-414.

- Gass, S. and E.Varonis 1985. "Task Variation and Non native/Non native Negotiation of Meaning" in Gass and Madden (eds.) 1985 *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Gass, S. and E.Varonis 1991. "Miscommunication in Nonnative Speaker Discourse" in Coupland et al. (eds.) 1991. *Miscommunication and Problematic Talk*. Newbury Park: Sage Publications.
- Long ,M. 1983. "Native speaker/ non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input" *Applied Linguistics* 4: 126-41.
- Varonis,E. and S.Gass. 1985. "Non-native/Non-native Conversations: A Model for Negotiation of Meaning" *Applied Linguistics* 6: 71-90.
- 尾崎 明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー -『聞き返し』の発話交換をめぐる-」『日本語教育』81号
- 町田 延代 (1995) 「電話における日本語のフォリナー・トーク・ディスコース 非母語話者の言語能力と調整・交渉」『南山日本語教育』第2号

【APPENDIX】

理解力テストA (タスクA)	理解力テストB (タスクB)
1.いつのじけんですか。	1.いつのじけんですか。
2.どこでおりましたか。	2.どこでおりましたか。
3.だれがじけんをおこしましたか。	3.だれがじけんをおこしましたか。
4.なにをしましたか。	4.なにをしましたか。
5.どうきはなんですか。	5.どうきはなんですか。
6.ひがいしやはどうなっていますか。	6.げんきんはいまどうなっていますか。
7.にげたあと、はんにはどうしましたか。	7.はんにはどうしていますか。
8.はんこうにつかったものはなんですか。	8.どうそうにつかったものは、なんですか。
9.はんこうにつかったものは、どこでみつかりましたか。	9.どうそうにつかったものは、どこでみつかりましたか。

(龍谷大学非常勤講師)